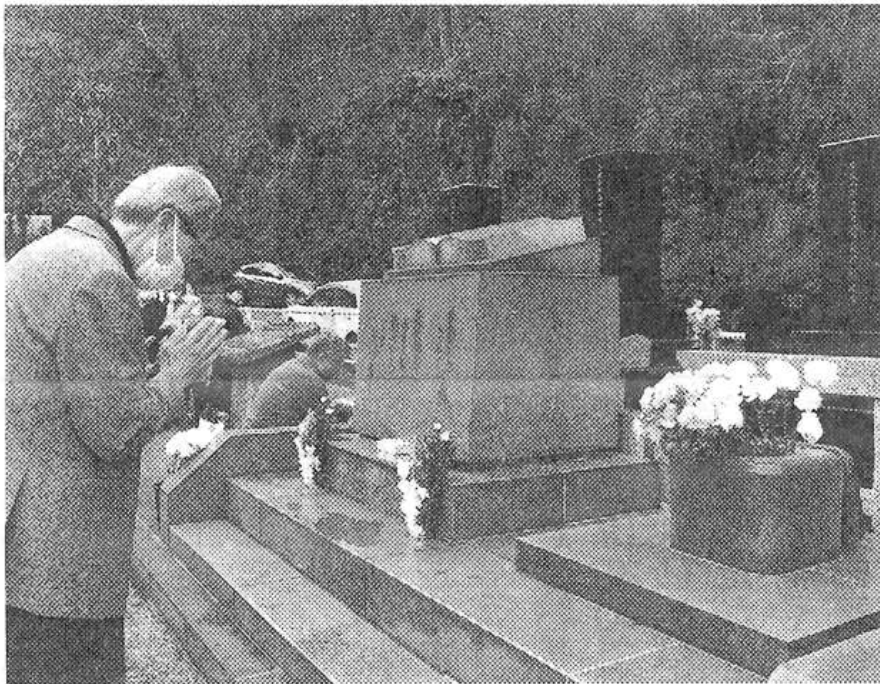


市営墓地で「光治良忌」

命日に先立ち墓前に献花

芹沢光治良命日の3月23日に先立ち、「光治良忌」が8日、市営墓地内の墓前で



墓前に献花し手を合わせる不破代表
＝市営墓地、芹沢家墓所で

行われた。今年は没後32年。芹沢文学を愛好する人など20余人が訪れて、墓前に白いカーネーションを捧げ手を合わせた。芹沢文学の読書会が各地で開かれてい

るため、毎年、首都圏などから訪れる人も少なくない。寒の戻りで冷え込む日だったが、集まった人達は光治良への思いを分かち合う、ひとときを過ごした。

主催者の沼津芹沢光治良文学愛好会代表の不破久温さんによれば、今年も光治良がパリに留学した年から100年。

子ども時代の光治良は冬でも満足な肌着すらない中で暮らしていたが、沼津御用邸があったために西洋文明と出合うことができた。晩年の文章で「村に御用邸がなかったら、私達は文明の光など知ら

ずに、一生平凡で終わったことだろう」と振り返っている。

28歳の時、官吏として社会統計学の研究のために留学したが、パリでは絵画、演劇、音楽などの芸術に触れ、また、肺結核の療養生活の中で思索を深めた。帰国後は「文学・創作の道」に進むことを決め、やがて国際的作家として認められるまでになる。

こうしたことを踏まえて今年、同会の読書会では「多文化交流と異文化尊重への誠実な文学を味わい、その普遍的な価値を考えたい」と不破さんは話した。